

B-13 ドライクリーニングの再汚染におけるバラツキとその原因 立正女大教育 西出伸子

目的 ドライクリーニングの再汚染に対する関心が、消費者、洗剤メーカー、洗たく業者の間で最近高まってきた。こうした傾向の結果として、各団体の間で独自の測定方法で試験が行われている。そこには当然、結果の不一致がおこっている。演者は再汚染の測定方法によるバラツキと、その原因を考察した。

方法 ① 5種類の綿布(60#ブロード、鐘紡A-2023、金中3号、市販60#ブロード蛍光処理、市販T/C混蛍光処理)のドライクリーニング液(石油、パークロールエチレンとも洗浄開始2分後)による再汚染率 ② 鐘紡綿布の工場規模ドライクリーニングによる再汚染のバラツキ(石油;洗たく物標準量90kg,フィルター容量26500ℓ/台,パークロールエチレン;パーマック25) ③ 試験布の取りつけ方法による再汚染率の違いを測定した。

結果 ① 綿布の再汚染率は溶液の性状により異なることは勿論であるが、3回くり返し実験の結果5%水準で綿布間に有意差が認められた。再汚染率は60#ブロード>鐘紡, 金中>市販T/C混, 市販60#ブロードの順で、密度、蛍光処理が影響する。② 6枚の試験布を台布に取っつけ更に洗たく物に取っつけた場合、パークロールエチレン、石油ともに試験布間の有意差は認められなかったが、台布間では5%水準で有意差が認められることが多かった。その原因は、洗たく機の構造、負荷量等に関係すると考察した。③ 取りつけ方法の違いによっても再汚染率に差が認められた。以上の結果から綿布の種類、投入枚数、取りつけ方法等の確立の必要が認められた。